

ひろしま郷土資料館だより NO.103

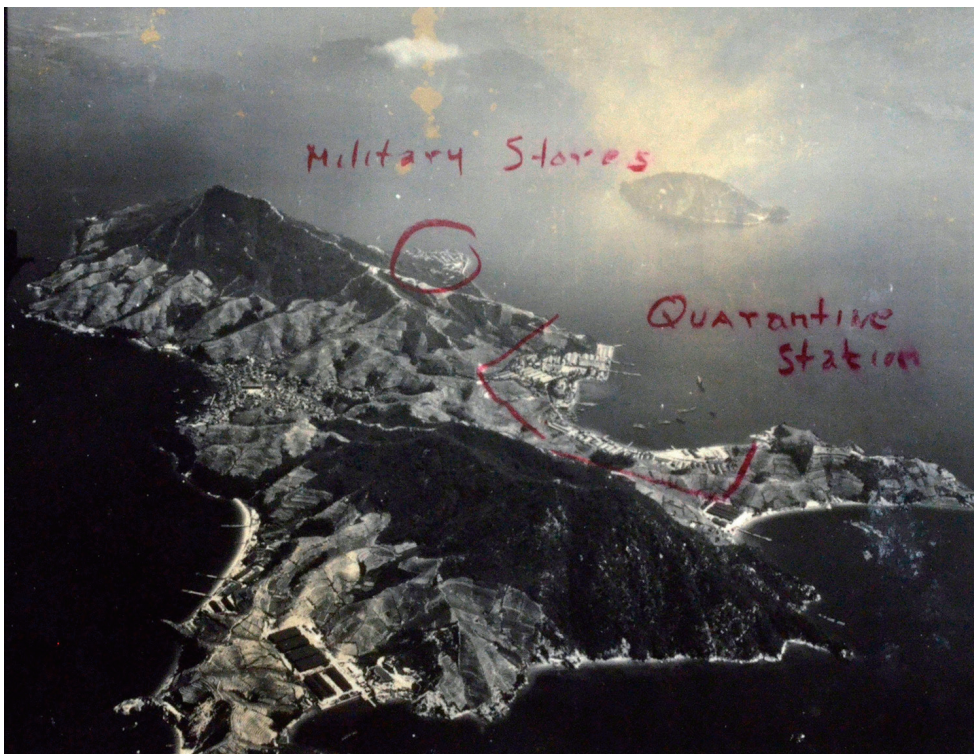
企画展「似島と金輪島—軍用港を支えた二つの島」

会期：令和3年12月4日(土)～令和4年2月6日(日)→1月8日(土)

再展示会期：令和4年3月8日(火)～27日(日)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館 令和4年1月9日(日)～3月6日(日)

かつての軍都広島への玄関一字品沖に浮かぶ二つの島、似島と金輪島。それぞれ周囲約16km、5kmという、本当に小さなこの二つの島が、日清戦争(1894～95)以来、軍用港一字品が担った陸軍の輸送を支え、第二次世界大戦が終わるまで半世紀にわたり、その軍事面での重責を果たしてきました。本展覧会はその実像を、文書などの実物資料約90点、写真資料220点により、できるだけ具体的に紹介することとしたものです。



▲被爆2日後の似島 昭和20年(1945)8月8日 個人蔵

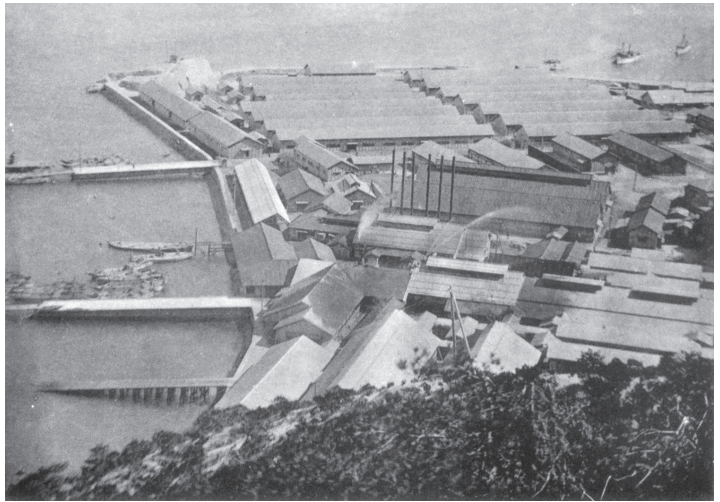
米軍が瀬戸内海上空で北方に向けて撮影したもので、中央の島が似島。その向こうに金輪島、さらにその左側に宇品を望むことができる。無造作に囲まれた「Quarantine Station」(=検疫所)では被爆した人々に対する懸命の救護が続いていた。

日清戦争は、戦闘よりも伝染病を中心とした病死者のほうがはるかに多かったことで知られています(戦死者約1,500に対し病死者約12,000人ともいわれます)。国内でも幕末以降数年おきにコレラが大流行し、

目次

- | | | | |
|-------|----------------------------|------|------------------------------------|
| P 1-3 | 企画展「似島と金輪島」 | P 7 | 活動報告 教室事業日程一覧
(令和3年10月～令和4年3月分) |
| P 3-4 | 企画展「広島を語るいくつかの資料たち」 | | |
| P 4-5 | 企画展「『ごんぎつね』が語る昔のくらし」 | 活動報告 | 郷土史講座・その他事業
(令和3年10月～令和4年3月分) |
| P 5 | 共催展示「どこかで?ゲンビ IN 広島市郷土資料館」 | P 8 | 次年度企画展の予定 |
| P 6 | パネル展示「『海図』のできるまで—海の地図作り」 | | |
| P 6 | スペシャルイベント「クイズでたんけん昔のくらし」 | | |

少なくとも数十万の死者が出るなど、防疫体制は必ずしも万全ではなく、戦地からの大量の帰還者に伝染病を持ち込ませないことが喫緊の課題となりました。陸軍ではこれに対応するため、陸軍次官児玉源太郎、中央衛生会委員後藤新平らを中心として日本で初めての本格的な軍隊検疫を実施することとし、その中心的な場として似島が選ばれることになったのです。大型の船舶が近くに碇泊でき、かつ陸軍の輸送の中心地であった宇品に近いことがその理由でしょう。検疫所の整備は、現在の似島学園の敷地にあたる場に明治28年(1895)4月4日に



▲似島第一消毒所 個人蔵

北西からの全景。手前が消毒所の諸施設、奥の細長い建物群が、兵舎や、伝染病患者と同船していた人たちなどを一定期間収容した施設である停留舎である。日清戦争時に比べ、海岸部の倉庫群の配置などに変化がみられる。

着工、世界最大、最新鋭の設備を備えてわずか2か月後の6月1日に開所し、10月末までに全数の約6割にあたる14万人近くが似島で検疫を受けました。続いて日露戦争(1904～05)の際には、日清戦争時に比べ数倍の人員、船舶の検疫を実施する必要が想定されたことから、元あった検疫所を第一消毒所として再整備するとともに、さらにもう一か所建設されることになりました。それが第二消毒所と呼ばれる施設で、現在の似島臨海少年自然の家の敷地にあたります。この時も似島は全数の約半分、66万人余りの検疫を行いました。以後、第一消毒所は閉鎖されますが、第二消毒所は第二次世界大戦の終戦まで軍隊検疫の中心的な場として位置づけられていました。

検疫所の施設はまた、捕虜の収容所としても利用されました。日露戦争の際にはロシア人捕虜2千数百人、第一次世界大戦ではドイツ人を中心として約540人が似島に収容されました。捕虜といっても、一定の行動制限があるほかは比較的自由な生活が送れたようで、特にドイツ捕虜は、3年間の滞在中、個々の捕虜の持つ高度な技量を日本人に教授したり、スポーツや芸術を通じて市民と交流を深めたりしたことが記録に残っています。大正8年(1919)3月に広島県物産陳列館(現在の原爆ドーム)で開かれた、捕虜の製作品展覧会で、捕虜の一人、カール・ユーハイムが日本で初めて、バウムクーヘンを披露したことはよく知られたエピソードです。

第二次世界大戦も終わりごろになると、似島では実際の検疫はあまり行われなくなったようです。戦局の悪化に伴い、帰還兵が激減したことが影響したものと思われるが、昭和20年(1945)8月6日の被爆の際には



▲金輪島工場 昭和6年(1931) 個人蔵

は似島は再び重要な役割を担うこととなります。陸軍船舶司令部が中心となって市内で被爆した負傷者が午前10時ごろから続々と船で運ばれ、検疫所で懸命の救護が行われました。その月のうちに収容した人数は1万人といわれますが、多くの人命がこの地で失われました。

一方、金輪島は日清戦争時に^{はしけ}舢舨300隻を改造したことをはじめとして、造船の面で船舶輸送の役割を担いました。戦地への兵力

の輸送は民間の輸送船が徴されて行いましたが、上陸用、あるいはその護衛用の舟艇などが金輪島で開発、製造されました。終戦時には千人規模の大きな工場となっていたようです。そしてこの島にもまた被爆時には多くの被爆者が運び込まれ、満足な治療を受けることもできず、命を落としたといえます。

(大室謙二)

会期中の来館者：1,726人

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会期中の令和4年1月9日(日)～3月6日(日)は臨時休館。3月8日～27日に再展示。



▲展示会場

企画展「広島を語るいくつかの資料たち

—郷土資料館新収資料展—

会期：令和4年2月19日(土)→2月22日(火) →3月8日(火)～3月27日(日)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館(令和4年1月9日(日)～3月6日(日))に伴う会期変更

コロナ禍でうちの片付けに着手した方も多かったようで、この2年の間は資料や寄贈に関するお問い合わせも例年より多かったように思います。資料によっては常設展示室の関連するコーナーにすぐ出すこともできますが、多くは受入の手続きを終えた後は、ふさわしいテーマの展示でお呼びがかかるまで収蔵庫で保管されることになります。

そこで、近年収蔵した資料を紹介する場を設けるべく本展を企画しました。収蔵資料なので個別に説明をつけて並べるだけでも一応展示にはなりますが、「広島」のことを何かしら伝える一面を持った資料をピックアップすることにしました。小さな展示ではありますが、それでも全部を取り上げるのは難しいため、一部を6つのコーナーに分けて紹介します。

(1)当館の前身である宇品陸軍糧^{うじなりくぐんりょうまつししょう}秣支廠で行われていた業務や研究に関する資料群です。実際に糧秣支廠で勤務し、醸造関係を専門とした中川哲夫さんがお持ちだったもので、粉味噌の製造など、醸造と保存の両面から興味深いものが見られます。糧秣支廠関連ではその他、女子工員の工員手帳や、報国隊に参加した学生用の腕章も展示しました。

(2)戦後旧糧秣支廠の工場を食品会社が使用し撤退した後に、大きく改変され傷んでいた建物を保存活用すべく行った外壁保存工事関係の写真を中心とする資料群があります。旧糧秣支廠缶詰工場の建物はその意匠が優れていたことから選ばれたのですが、全国的に見てもその保存工事は意義あるものだったと言われます。

(3)今話題の広島陸軍被服支廠に関する資料群です。親子で被服支廠に勤務された久保さんの辞令書や、制服姿の女子工員や支廠内での写真、また廠内で行われていた吹奏楽団の活動を窺うことのできる資料もあり、被服支廠の様々な側面を語ってくれています。



展示室入口のようす

(4)戦争に関わる資料で、満州事変などの下賜品であるブロンズ像や従軍記章、灯火管制電球のほか、糧秣廠で調達していた固形燃料缶などもあります。

(5)「広島風景」として、大正時代の葬儀写真や昭和30年代にカラーで写されたスライド写真のほか、歌舞伎役者が牡蠣を舌鼓を打った時記した色紙や大正時代の旅券、昭和9年の「明治天皇行幸記念教育品展」に出品された女学生の刺繍作品と賞状なども展示しました。このコーナーでは、明治時代から現在の本通にあった薬局「井筒屋」の木製看板が目を引きまます。店の所在地も特定でき、原爆以前の看板が残っていたことは、かつての本通の姿を伝える上で貴重です。

(6)銅蝨^{どうちゅう}を初め広島で作られた作品・製品の7資料です。松井広島市長の父松井昭雄さんが銅蝨作家だったことは有名ですが、その工房で使用されていた銅蝨製作の道具や製品のほか、意外にも昭和中期頃まで広島で製造され、当時のものが現在でも高評価を得ている電気バリカンや、また昭和初期に実際に展覧会に出品されていた記録が残る草津(西区)出身の漆芸家河面冬山^{こうもとうざん}の巻煙草入なども展示しました。

(7)最後に、広島といえば、のカーブ関係の資料で、草創期の株券や、優勝時の新聞や雑誌、記念乗車券を展示しました。

会期を1か月近く残して終了せざるを得なかった企画展「似島と金輪島」が観覧を希望する声にお応えして再展示になったことから、本展はコロナ対策で閉め切りにしていた体験ルームで行うこととし、展示ガイドも土曜日に行うこととしました。資料寄贈者の方も多く観覧してくださり、資料を活用させていただけて本当によかったと感じました。今後も貴重な収蔵資料を公開する機会を持ちたいと考えています。(前野やよい)

会期中の来館者：623名



▲(2)旧陸軍糧秣支廠缶詰工場の外壁保存工事写真と関係資料の展示のようす

▶(5)井筒屋薬房看板

企画展「『ごんぎつね』が語る昔のくらし」

会期：令和3年9月4日(土) →10月1日(金)～11月23日(火・祝)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館(令和3年8月20日(金)～9月30日(木))に伴う会期変更

企画展「『ごんぎつね』が語る昔のくらし」は当館の秋の恒例展示ですが、令和3年度は臨時休館と重なり、当初会期から約1か月遅れの10月1日からの開催となりました。本展では、主に小学校中学年の国語で学習する新美南吉の代表作『ごんぎつね』のストーリーをたどりながら、社会科の学習単元「昔の暮らしの道具と人々の暮らしのようす」で学ぶ昔の生活道具を紹介しています。主に小学校中学年が対象となる展示内容ですが、『ごんぎつね』は昭和31年(1956)以来国語の教科書に採用されている新美南吉の代表作でもあり、保護

者世代には懐かしさも感じてもらえるものとなっています。令和3年度は臨時休館の解除直後の開催となったことで、校外学習の場として展示を直接活かしていただく機会が残念ながら減ってしまいましたが、土日に調べ学習を兼ねて展示資料を熱心に観覧するご家族が多くいらっしゃいました。展示では、生活道具「はっすん」と地元広島^{広島}の郷土料理のルーツとの関わりの紹介や昔の道具と私たちが使っている生活道具を比較し類似点や相違点を自分で探すことを通して新たな気づきにつなげられるよう、学習内容との関連性からヒントとなるような補足パネルを新たに設置しました。



『ごんぎつね』のストーリーをたどりながら、「とる」「すまう」「つくる」などジャンル別に昔の道具を中心に展示

時代の流れとともに生活スタイルが変化し、衣食住に関する生活道具も進化しています。私たちが日々の生活を送る中で「普段使い」でもある生活道具のことを意識する機会は多くありませんが、先人の暮らしぶりを想像し現在の私たちの生活と比べることで、いつの時代も日常の生活環境をいかに便利で快適に過ごすか、という道具にこめられた人びとの生活の知恵と工夫が浮かび上がってきます。この展示の主な対象となる小学生の皆さんには、衣食住に関する昔の道具に触れ、その暮らしぶりを想像することを通して日々の暮らしを豊かでより便利で快適なものにという人びとの思いと工夫を発見する機会として、大人の方には新美南吉の作品の持つ魅力に改めて触れるとともに、子どもの頃学習した内容に懐かしさを感じつつ生活の中で道具を実際に使った実体験を子どもに語り継ぐなど、世代間の交流を通してこの展示を多くの方に楽しんでいただければ幸いです。

(川橋奈織)

会期中の来館者数：2,374名。

共催展示「どこかで？ゲンビ IN 広島市郷土資料館」

主催：広島市現代美術館・広島市郷土資料館

会期：令和3年11月30日（火）～12月26日（日）

広島市現代美術館は、令和5年3月のリニューアルオープンに向けて現在休館中ですが、自館のコレクションを紹介するサテライト展示を各所で行っています。今年度、広島市郷土資料館でも行われた共催展示には、衣食住に関するテーマのアート作品がやってきました。^{あいおう}齧嘔の、虹色のディナーセット「レインボーテーブル」、広島出身の三宅一生の、畳んだ状態では薄っぺらな円盤状のドレス「フライング・ソーサー」、そして草間彌生^{くさまやよい}の、赤と白の水玉模様で覆われた携帯電話と置き台のセット「ドッツ・オブセッションー水玉で幸福いっぱい」の3作品です。当館の展示は、どちらかというと茶色やモノトーンのイメージですが、この展示ロビーだけはポップでカラフル、生き生きしたまさに「異色」のコーナーになっていました。幸いコロナ禍でもなんとか展示を開催することができ、良かったと思います。



現代美術館のボランティアスタッフの解説を聞く小学生

(前野やよい)

会期中の来館者：1,117名

パネル展示「『海図』のできるまで—海の地図作り」

共催：第六管区海上保安本部海洋情報部

会期：令和4年2月1日(火)→2月22日(火) →3月8日(火)～3月21日(月・祝)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休館(令和4年1月9日(日)～3月6日(日))に伴う会期変更

海の地図である「海図」は、普段、あまり目にすることはありませんが、海に囲まれた日本の海上輸送ではなくてはならないものです。日本で「海図」が作られはじめてから150年目にあたるのを記念して、「海図」の展示第2弾を行いました。

「海図」の作り方について、昭和26年製作の「海図のできるまで」の映像からのパネル写真と戦後の「広島港」の海図を使用して説明しています。「海図」の作り方を、①基準となる点の設置 ②海岸線の計測 ③海上位置の計測 ④水深の計測 ⑤潮汐の計測・予測 ⑥海図を最新に維持、の順で説明しています。現在の海図づくりは随分機械化が進んでいますが、当時の海図づくりの写真や説明を見ると、海図の作り方や仕組みが良く分かります。あわせて当時の測量器具(六分儀、三杆分度器、測鉛)の展示も行いました。来館者には、興味深くご覧いただきました。(河村直明)

会期中の来館者：428名



スペシャルイベント「クイズでたんけん昔の暮らし」

会期：令和4年月11月3日(月・祝)

11月3日(文化の日)にクイズラリーを実施しました。館内で昔の暮らしに関わる展示物を捜し、楽しくクイズに答えながらじっくり見ていただくという企画です。問題は全部で10問。常設展示から6問、企画展「『ごんぎつね』が語る昔の暮らし」から2問、「海図150年」パネル展から2問を出題しました。参加者は解答用のボードを持って館内を巡りました。またパネル展「海図150年」のコーナーでは、第六管区海上保安本部海洋情報部の方から個別にわかりやすく海図の説明をしていただきました。親子連れも多く小さなお子さんは保護者の方に教えてもらいながら真剣に問題に答えていました。参加者には、「れんガール」又は「うみまる君」のハガキと「うみまる君」コースターをお渡ししました。(河村直明)

当日の参加者：136名



活動報告

令和3年10月～令和4年3月

教室事業

実施日	事業名	参加者
10月16日(土)	教室 「手すきハガキ作り」	13名
10月23日(土)	親子教室 「お手玉作り」	5組11名
11月20日(土)	親子教室 「絵手紙で年賀状作り」	9組20名
11月27日(土)	大人向け教室 「水引き飾り作り」	14名
12月18日(土)	親子教室 「羽子板作り」	9組20名
12月25日(土)	教室 「ぐにゃぐにゃ凧作り」	7名
1月16日(日)	教室 「けん玉教室」	新型コロナウイルス 感染拡大防止のための 臨時休館に伴い中止
1月29日(土)	親子教室 「糸つむぎ体験」	
2月20日(日)	大人向け教室 大人の染色体験「藍の絞り染めTシャツ作り」	
3月19日(土)	教室「もんきりのランタン作り」	7名

文化の日スペシャルイベント (新型コロナウイルス感染症予防の観点から令和3年度も「駄菓子作り広場」は中止)

実施日	事業名	参加者
11月3日(水・祝)	クイズラリー「クイズでたんけん昔の暮らし」	136名

ひろしま郷土史講座

実施日	事業名	参加者
12月11日(土)	第1講「広島海～潮汐の話を中心に～」	38名
1月8日(土)	第2講「似島と金輪島一軍用港を支えた二つの島」	29名
2月5日(土)	第3講「江戸時代の地図作りと広島」	新型コロナウイルス 感染拡大防止のための 臨時休館に伴い中止
3月5日(土)	フィールドワーク「似島戦争遺跡めぐり」	

その他の事業

実施日	事業名	主催等	参加者
11月5日(金)	授業「文明開化の時代の広島」	まちなか西国街道推進協議会 ・千田小学校	102人
11月7日(日)	工作指導「組みひもづくり」	秋のグリーンフェア2021実行委員会	184人
11月26日(金)	講演「お好み焼から知る広島」	安佐南区図書館	15人
1月17日(月)	授業「博物館資料論」	広島市立大学	26人
2月8日(火) →3月2日(水)	授業「文明開化の時代の広島」 ※新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う実施日変更	まちなか西国街道推進協議会 ・幟町小学校	72人
2月25日(金)	授業「文明開化の時代の広島」	まちなか西国街道推進協議会 ・袋町小学校	36人
2月27日(日)	講演「豊かな里海・広島湾一海からの めぐみと人びとの暮らしー」	南区図書館	新型コロナウイルス 感染拡大防止のため中止

令和4年度(2022) 企画展紹介

企画展 「大解剖！副読本『わたしたちの広島』 —くらしのうつりかわりを学ぼう—

令和4年4月16日(土)～7月3日(日)

昭和32年(1957)より、広島市の小学校3・4年生に学び受け継がれてきた社会科副読本。本展では現在の副読本に取り上げられている広島市の様子と人々のくらしのうつりかわりについて、郷土資料館独自の切り口で小学生向けに紹介します。



紙屋町交差点付近(昭和初期)当館蔵

企画展 夏休みおばけの博物館

令和4年7月16日(土)～8月21日(日)

昔の人々も楽しんだ夏の風物詩・おばけ屋敷はどこなところ？おばけを生み出した人々のくらしや思いも知って、ひと味違う夏休みを体験しましょう。



五日市(佐伯区)の雷獣

企画展 「『ごんぎつね』が語る昔のくらし」

令和4年9月3日(土)～11月27日(日)

新美南吉の童話『ごんぎつね』のストーリーをまじえながら、童話に登場する昔の道具や人々のくらしを紹介します。

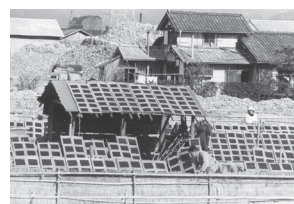


ごんぎつねと運ぶ道具

企画展 「実は広島」

令和4年12月10日(土)～令和5年2月26日(日)

全国的に知られた企業や製品の中には広島発祥であったり、広島で相当のシェアをもって生産されていたりするものが少なくありませんが、意外と知られていないものも多くあります。こうした事例やこれらが生み出されてきた時代背景などを紹介します。



かつて全国随一の生産量を誇った海苔養殖(現南区) 写真提供 大下隆雄氏

企画展 「広島の近代化を担った建物たち —建造物からたどる広島の歴史—

令和5年3月11日(土)～5月7日(日)

当館の前身である旧宇品陸軍糧秣支廠をはじめ、広島市とその周辺地域に残る明治～戦前の建造物とそれらが担った役割にスポットをあて、広島町の近代化の歴史やその背景を紹介します。



絵葉書「宇品陸軍糧秣支廠 廠舎(大正五年四月)」 当館蔵

今後の新型コロナウイルスの感染拡大状況により、臨時休館や展示会期・教室事業等の変更または中止の可能性があります。あらかじめご了承ください。最新の情報は当館ホームページ等でご確認ください。

ひろしま郷土資料館だより No.103

令和4年(2022)3月31日発行

編集・発行 (公財)広島市文化財団 広島市郷土資料館

734-0015 広島県広島市南区宇品御幸二丁目6-20

TEL (082) 253-6771 FAX (082) 253-6772

URL <http://www.cf.city.hiroshima.jp/kyodo/>



広島市郷土資料館

HIROSHIMA CITY MUSEUM OF HISTORY AND TRADITIONAL CRAFTS